『なぜ「大学は出ておきなさい」と言われるのか』
キャリアにつながる学び方



著者：浦坂純子
出版：ちくまプリマー新書
発行：2009 年 1 月

「どうして大学に行かないといけないの」あるいは「どうして勉強しないといけないの」という問いに対して、明快な答えを示すことのできる人は少ないのではないか。そのような問題に悩む中高生、大学生にアドバイスしようという意図で書かれたのが本書である。

著者の浦坂氏も大学で教鞭を取られているということで、大学生の日常生活や、思考様式を把握したうえで書かれたためか、我々大学教員から見ても「その通り」と言いたくなる主張が多くみられる。

まず一章では、世の中にはいかに多くの仕事があり、読者（おそらく高校生から大学生）が就きたいと思っている職業は、多くの仕事のうちごく一部にすぎないことが示される。すなわち、読者が「なりたい」と思う職業は、きわめて狭い範囲（知識）の中から選ばれたにすぎないというのである。

また、働くことの意義として、生活するための給与を稼ぐ以外にも、やりがいや自己実現のためにも働くことがありえることを説く。しばしば生涯賃金に関する情報や、学歴による賃金格差を示すことによって就業意欲を高めようという言説も見られるが、「金のためのみに働くのではない」ことを強調するのである。

主に高校生を対象とし、なぜ勉強しないといけないのか、という問題を進路選択の問題と併せて考えるのが第三章である。端的に言えば、勉強することによって、将来の進路における選択肢は広がる、というのがヒントである。

「苦手だから」「受験科目ではないから」と言って、ある教科の勉強を怠ったことはないだろうか。苦手科目を「捨てる」ことは、当該科目の課せられる試験を受けられないことになる。そのことは、受けることのできる大学、学部を限定してしまうことになり、さらにはその先にある進路にも影響するだろう。そのような重大な決定を、いくら受験に合格するためとはいえ、高

校２、３年生の時点で行ってもよいのだろうか、というのが著者の問題意識である。

「数学を受験した人の年収はそうでない人のものより高い」というショッキングな調査結果からは、安易に苦手科目を投げ出さない、すなわち近視眼的な価値観に流されない、そういう能力こそが社会において有用である可能性が示唆されている。

しばしば用いられる「近視眼的」という用語が、本書のキーワードになると思われる。「なりたい自分」をまず決めて、その目標に向かって進んでいく。これがある意味では「効率的な努力」であるといえる。目標達成に不必要な努力はしていないのだから。しかしながら「なりたい自分」に必要のないということで「捨ててしまった」ものが、将来も不要であるとどうして言えるのか？「私立文系に行くから数学はいらない」という決断をして、自分の一生は数学と無縁でいられるだろうか？

どうせ、はるか将来のことは誰にもわからないのである。では、我々（特に読者層の生徒・学生）はどうすれば良いのか？

高校の方針で、大学入試と関係のない科目まで勉強した（させられた）浦坂氏は以下のように述べる。「アンチ受験としか言いようのない教育が、気づかぬうちに学ぶことそのものの幹を太らせていた（中略）この幹が立派であれば、枝葉はいつでも自分で伸ばせるものなんですよ。」

勉強をなぜするのか？自分の将来における選択肢を広げるため。

大学になぜ行くのか？自分の能力の幹を太らせるため。

では就職活動はどうすれば良いのか？大学で幹を太らせればなんとかなる。

これが筆者の受け取ったメッセージである。若い人に薦めたい（あるいは若いうちに読んでおけばよかった？）と思われる良書であった。

起業教育委員会委員
大阪商業大学 総合経営学部 公共経営学科 教授　松村政樹